

美術教育

思いや願いをかたちにする

〜美術の特権〜

福田好孝(岩内高校)
十河幸喜(江差高校)

実践報告

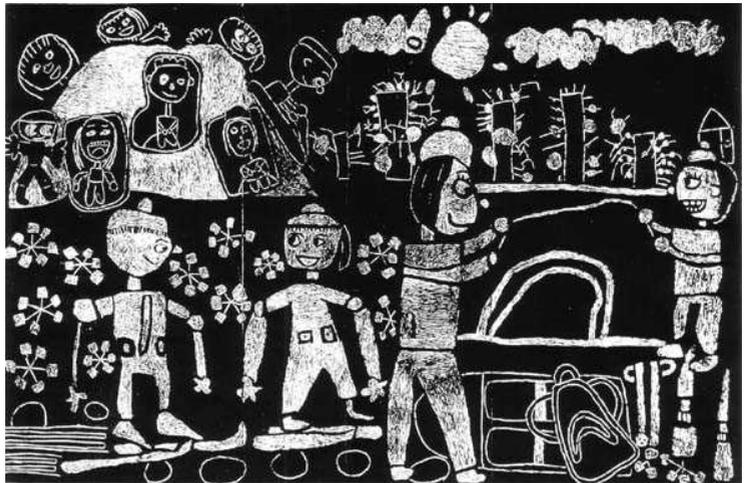
「4人でいった楽しいスキー」卒園記念制作・木版画

深川市・多度志保育園

「人間はものをつくる生きもの、そこで考える生きもの」と齋藤 恵氏。(齋藤氏は、多度志保育園・巨大木版画制作の協作者である)分科会壁面に掲げられたこの作品を背に言い放った言葉は、園児に寄り添い制作をしてきた実証論である。一九八七年の初版から四半世紀、今では卒園記念として制作すべきものとして定着している。「本物の版画をやらなければ卒園できない」という園児の声が象徴している。

この木版画

は、タテ百八十二センチ×ヨコ二百七十三センチ(ベニヤ板三枚分)もある巨大な壁。この大作にたった三人の保育園児が挑んだのだ。齋藤氏は「ただ、保育士と園児に寄り添うだけ」と言っているが、手に馴染むよう工夫し道具を自作する。「切れない」と言ってきた



た園児の彫刻刃を研ぐ。「体験したことを率直に彫り進められるよう表現に必要な最低限の手助けをしている」とも言う。「こうしなければならぬ、ああしなければならぬ」という制約は、表現者である園児たちに押し付けることはない。それは、

大人の尺度で物事を考えず、子どもの目線を尊重するが故。子どもにとって、絵の全ての形に意味があり考えあつてのことだから尚更なのである。

卒園の証、受け継がれる版画である。

「地域素材を生かして」

旭川市立愛宕東小学校 駒井 崇

前任校（小規模校）と現任教（大規模校）双方の図画工作の授業実践報告である。旭川、東川はクラフトの町であり、その地域の利点を工作の授業に生かそうという発想。工作の材料は、家具店から出た大鋸屑、工務店から出た古材、古釘などである。

小規模校の実践は、大鋸屑を使って木粘土をつくり「自分のお城をつくろう」というもの。ミキサで砕いた新聞紙に、おがくず、でんぷんのりを混ぜ手作りして木粘土をつくる。手間のかかる作業をとまなう。小規模校だからできる実践でもある。地域素材を生かして工作材料（木粘土）つくるところから子どもたちは関わりを持つのである。その材料を使って自分だけのお城をつくるのであるから楽しい。

大規模校の実践は、工務店（その工務店には子どもたちの家族も働くという）から出た三千本もの古釘を分け与え、各自のイメージで自由に粘土に刺し込み造形させるもの。役割を終えた古釘などに新たな価値を見出し、おおらかな造形表現へと

つなげている。二つの実践報告からは、ダイナミックな授業の様子、いきいきと制作に取り組んでいる様子をうかがい知ることができる。

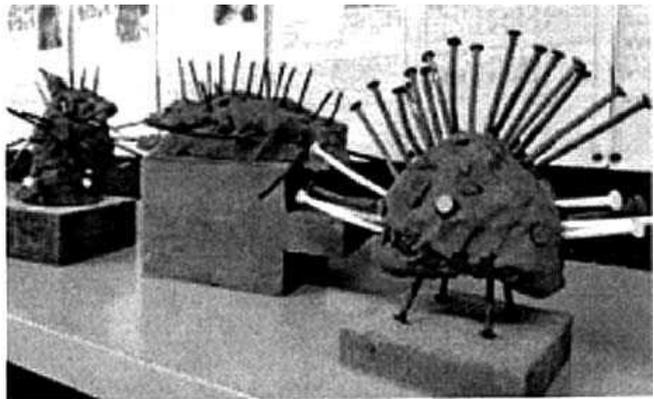
「教材をただの物として与えるのではなく、人の思いやつながりを感じるものとして子どもたちに出会わせることで意欲を高めることができる」との狙いも明確にある。学校と家庭、地域をつなぐ図画美術教育が展開されているのである。更に発展させ、広げてほしい。

鑑賞「鑑賞八」

〈作者や時代背景に光を当て、作品の側面をみる鑑賞〉

美深町立仁宇布小中学校 茶谷 裕樹

「寄せ集め、ただのハチ・・・」とレポートタイトルに対す





る本人談。ではあるが「積み上げて、鑑賞Ⅷ」である。茶谷実践の魅力は、茶谷氏そのものと言っても過言でない。フットワークを、五感（五官）を、最大限に利用した実践を展開。今次実践報告でも昨年の反省に立ち、自らがどのような動きが必要で、どのような取材をすることが、その子、その集団にとっての活動につながるのか、手法や方策を手練り寄せるように身体を動かしているのである。具体的に今回であれば風景画。校舎を描くことよって構造物の遠近から生じるパースペクティブのとり方も覚えてもらいたい狙いを持つ。最も効果的であろう

場所を探す。自らも、その場の絵を描いてみる。

その過程が、結果として、生徒も本人も積み上げの仕事をしていることに繋がっている。

ものすごく基本的で、大切なことでありながら、気がつけば、置き去りにしてしまっている部分だつたりしないだろうか。

このような、基本的で、極々当たり前なことを茶

谷実践から再確認させられた。足元をしつかりと踏みしめた活動をしなければならぬとも考え、教えられた。

ちなみに茶谷氏は、主免許である技術の他に、美術と理科の三教科を受け持っている。

「鑑賞に四苦八苦」

網走市立第三中学校 成田 悠

美術教育で鑑賞指導を大切に考え、何とか形にしたいと考え、もがいている新卒四年目の若い実践家の報告である。

美術教師として教材研究を続け毎年少しずつ授業内容に変化を与え奮闘してきたが、鑑賞授業での研究不足を感じている。

「今回も鑑賞授業に失敗した」「もつと鑑賞の方法を研究しなければ」という危機感の背景には、もしかしたら美術の授業は最後かもしれない中学生たちに、もっと伝えるべきことがあるのではないか、自分の授業方法は違うのではないかとという自省があり、子どもたちを大切にしたいという思いがある。

鑑賞指導は扱う分野が幅広く、すべてを扱うことは難しい。どの分野、どの時代、どの作者、どの作品を扱うかを、教える側がどのように選択しどのようにその思いを伝えるかが問われているのである。

レポートのまとめには、鑑賞Ⅱプリント学習・映像鑑賞にな

っていることに気づき、子どもたち同士が鑑賞する作品について語り合うこと、子どもたちが制作した作品について互いに語り合うことの大切さにも気づいているとの記載がある。課題は明らかである。

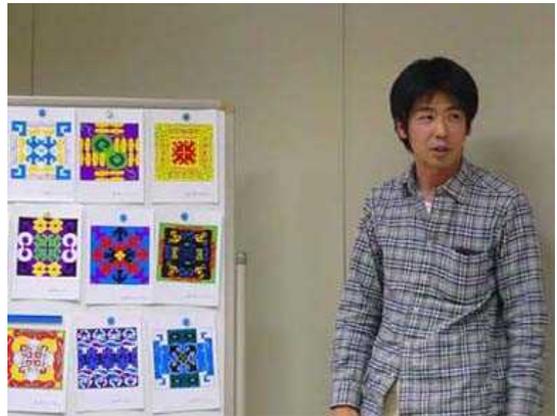
実践を通して成長することを求めたいが美術の授業が最後になるかもしれない子どもたちが目の前にいるということも現実にはある。急がなければならない。この分科会には鑑賞指導に優れた先輩教員の実践がある。研究のスピードを早めてほしい。

平面構成「アイヌ文様を使って」

苫小牧市立緑陵中学校 前田 求

アイヌ文様を使つての授業実践である。昨年の本分科会でも、過去に長い時間をかけて十分に論議がなされてきていることでもあるが、「この題材に取り組むということは、背景に難しい課題が多々あり、教える側がその課題を真摯に研究することが不可欠であるということ。そして、その背景にも触れながら、この文様は、造形的に美しいものとして、教えるべき題材である」という、確認と伝承すべきことがある。

持ち込まれた作品は、どれも色彩豊かで完成度が高いもの



「活と美」地域の民族館にも協力を得て、「今、ここ、この地域に暮らす自分たち」と、制作と地域文化とも結びつけている。この分科会としても支援していきたい実践であり、今後の展開に期待したい。

「2012・毎日の授業実践から」

岩内高等学校 福田 好孝

「教育において何事も子どもたちの自己責任にしてはならな

ばかりである。「今ままで、これだけ、鮮やかなものは記憶にない」との参加者からの声もあった。ここに至るには、基礎・基本的な仕事を前段で確実にしているからだ。この題材設定をするにあたって、「造形的に美しく教えるべき題材」という意識がなければそのような作品群にはなるまい。事前学習に「生



い」と今次分科会で提起。ここには美術教育だけではなく、教育・学校・地域が抱え、考え、大人側があるべき姿勢はいかにあるべきなのかを問うたように思えることばである。

「どうやったら、描かせきることができなのか」「どういう活動をすることで、獲得すべきことを獲得させることができるのか」今次報告も、高校美術の入り口として「目の前のものを置いて描く」という実践である。全員が同じ条件で描けるように、全員に同じモチーフを用意する。教科書の作例通りでもなく、「高校生だからこのくらいは描けるだろう」との迫り方でもない。目の前の子が、岩内高校の美術室に来るまでに、どのような活動をしてきたか、経験が少ないから描けないだろう。と思い込んだりもしない。

その状況に応じて、教え、経験させるのだ。制作のヒントであり、励ましの美術通信であり制作案内でもある”ART・I W A N A I”を配る。鉛筆でのトーン



の練習を兼ねたワークシートもこの前段で配付、制作させている。さまざまな角度、切り口、手立てを持って、描かせきっている。

ものを描かせる、高校美術の入り口として、自己を獲得させることは・・・目の前の子どもたちを丸ごと抱え、向き合っている。今次提起からは「確かな学力は美術教育でつけられる」という福田氏の信念が感じ取れる。

「石膏彫刻・こころのかたち」

札幌白陵高等学校

大崎 智尋

赴任早々、荒れ放題の美術室の再生に取り組むという壮絶な状態からのスタート。子どもたちとの関係構築にも想像を絶するエネルギーを費やした。赴任後三年間の奮闘の記録とも言える実践報告である。

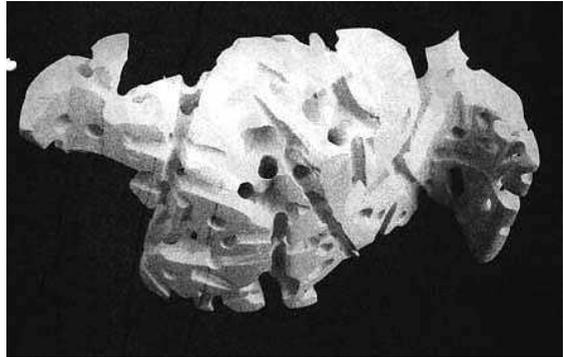
学習環境の整備、人間関係改善が進み、子どもたちの心にも大きな変化、成長が表れ、授業にも積極的に参加するようになった。教材研究も大きく進み、相当に工夫された結果であるうとも思う。

その心の変化に寄り添うように取り組んだのが、「石膏彫刻・こころのかたち」である。対象学年は、高校二年生である。落ち着きを取り戻し、進路等に迷う時期に相応しい良い課題であると思う。

子どもたちがこの授業を「楽しい」と集中して取り組んでいる理由を五つあげている。

- 一 集中しすぎてケガをしないように、話しながら楽しく取り組ませている。
- 二 石膏を固めたりナイフで削ったり初めてのことが多い。
- 三 工程が明確で絵画より取り組みやすい。
- 四 力を使う、刃物を扱うスリルもあり面白いと感じる。
- 五 完成度の高い作品を写真撮影し廊下に展示。自尊心が高まる。以上。

教える側の周到な準備、仕掛けがあり、子どもたちがそれに応えて楽しく取り組み、良い作品を創っているのである。「子どもたちが生き生きと取り組む姿を見ることが教師にとっても楽しい時間である」とのまとめもある。三年間の努力が報われ、確実な成果をあげている優れた教育実践がここにはある。



「諸思感綴」

一人の子どもの三年間の制作に目を向けての実践報告である。三年間で取り組んだ作品を持ち込んでの熱い語り口は十河氏ならではの。

高校美術Ⅲの授業風景は自然体で「アトリエ状態」とのこと。「授業時間に美術室に入ってきて、取り組む課題もさまざま、それぞれの制作をして、必要あれば先生を呼ぶ、時間がきたら片づけして、それぞれ美術室を出る」理想的な授業形態を作り上げている。

江差高等学校 十河 幸喜



中学校時代はそれなりに手のかかった子どもたちに美術の魅力を伝えきって、三年間をかけて美術で大きく成長させている。中学校時代の先生が作品を見て驚き「高校でこうなったの」と言わせる力が美術教育にはあるのだ。一生懸命作品制作に取り組む姿を見てほしい。(四枚の写真参照)

美術教室を子どもたちが

成長する空間として大切にし、そこで繰り広げられるドラマを見続け、教えるべきことは確実に伝え、自らも楽しんでいふところの深い指導者がそこにはいるのである。

「美術教育の可能性」

釧路江南高等学校 上野 秀実

今次分科会では、子どもたちを支援する立場での提言が多くあり、うれしい。「心にさまざまな課題を持つ子どもたちが美術を求めてやってくる」との上野提言は、美術教育がこれからも必要不可欠な教科科目であると確信を持たせてくれた。

また、美術教師が子どもたちの存在を大切にし、「美術室が保健室と同じくらい必要な場所」との発想も大きく広がっていかなければならないと思う。

「いま、美術教育に関わる一人として」と記述がある上野レポートを転載してまとめたい。

『私は、現在の職に就いてもうすぐ三〇年となる。経験は重ねているが自分の見の狭さを痛感することが多いのも事実である。子どもたちの多様な感覚とその表現への理解は常に意識してきたつもりだが、現代の子どもたちにとって身近な美術という意味で動画や写真といった映像などを教材として扱うこと

への抵抗感があつたのも事実である。「見る・描く・考える」という美術の普遍性を持った一見地味であるが、これからも大切にしなければならぬ描画指導や、作品への問いかけや自らを投影できる鑑賞はより充実させたいことだが、現代の表現としての領域の拡張も積極的に行う必要もあるはずだ。子どもたちにとって身近なメディアであるアニメ、マンガ、写真などの表現研究も今後進めたいことの一つである。

最後に、「教育が子どもの可能性を潰してしまう」ということばがいまの自分にはとても心に刺さるように感じる。自分の価値観を押し付けることなく、子どもたちの可能性を広げてゆくために私はどうあるべきなのか、自分自身に対し常に問い続けなければならない』

美術教師が柔軟に変わり続けることの重要性を問う提言である。